

刊夕

途上漫筆

(君)

此點から見て如何に渡弊
困窮して居つてもこれを救
ふものは、矢張己れである

日稿

行報

六月十日祭曜日

刊(日休)

拓華微笑

劇がまた始めた

意外だつた

てまゐります

田町のそれを凌

お盛んな平町

大工附踏切背

△後〇、〇五 バラライカ獨

△七、〇〇ア ニュース

面交通量。場末

平消防組野球チ

ソユをだに厭ふ

つてお異れ福松や氣を注げ

奏スチエブキン

生爾相場

なん失敬な

追がは本格的

タ氣の採める空

唐草の風呂敷に行李を包ん

だのを背負つて片手に傘や

た煤竹紗の合羽にお高祖

を許す(明治三)△若視全

いたから朝夕信をおしな

府に依つて爲さしむるこ

思ふものである。(六月十五

するは甚だ時宜を失するの

譏りは免れ難いであらう。

事を忘れてはならぬと云ふ

眼目を脳裡より離れてはな

ふものである。矢張己れである

